

共に学ぶ生徒の育成を目指して

～異学年・異校種間交流授業を通した学び～

研 究 部

1. はじめに —平成16～18年度研究概要について—

本校では平成16年度の研究主題と副題を「21世紀を担う生徒の育成を目指して～発達段階を見据えた[確かな学力]の探求～」として研究を進めた。「教師は生徒の心身の発達段階や学習進行状況をしっかりと理解・把握し、それに基づいた、学習内容や指導方法を選択すれば、子どもの学力の向上が図れる」という観点に立ち、「確かな学力」を生徒に育むためには、「子どもの心身の発達段階とは何か」また「発達段階に応じた学習指導のあり方はどうあるべきか」を教師がみつめ直すことに努めた。その際、各教科ごとに「確かな学力」を構成する様々な力の中から最も育成したい力を取り上げた。その力に関して、各教科で現状の生徒の発達段階について作業仮説を立てて、学習内容や教材配列、題材・課題の与え方や指導方法を工夫し教科毎で授業実践をおこなった。

この研究実践から、小中および中高の連続性や段差の状態に目を向ける必要があると感じ、中学校3年間を単独で扱うよりも、前後の学校での子どもの発達段階を視野に入れて授業を展開することで子どもたちに「確かな学力」がつくのではないかと考えるに至った。

そこで、平成17年度は研究副題を「小・中の連携を見据えた中学校教育の探究」として、小・中学校のつながりに目をやり、附属小中連携小委員会が作成し、合同職員会議で承認された小・中学校共通の「教育理念・目標・方針」にしたがって、中学校教育のあり方の見直しに着手した。特に、「確かな学力」が包含するいくつかの力のうち、生徒に育成すべき重要な力を「問題解決力」と位置づけ、各教科教育の実践に取り組んだ。そこでの問題解決力とは、「自分にふりかかる諸問題を解決し、たくましく生きていくために必要な能力や資質」と考えた。その能力や資質は、単純な1つの力として存在するのではなく、複数の力が密接に関連して働く力にとらえた。

平成17年度の研究を受け「問題解決力」の育成をよりしっかりとしたものにするためには、更に何が必要になるかを考えたとき、森敏昭先生（広島大学大学院教授）から次のようなご助言をいただいた。

「学校教育の中で問題解決力を育成するには、これからの時代、他者とかかわりの中で生徒が自己実現を図れるようにすることが重要である」

そこで、平成18年度は研究主題と副題を「共に学ぶ生徒の育成を目指して ～コミュニケーション力を高める実践研究～」として研究を進めた。本校では他者とかかわりながら共に問題解決にあたることを「共に学ぶ」と位置づけた。生徒たちに「共に学ぶ」体験を積みませ、その重要性や意義を体得させるためには、人間関係づくりやコミュニケーション力が重要な鍵になると考えた。「共に学ぶ」とときには他者の意見を正しく理解し尊重すると同時に、自分の意見を分かりやすく表現する能力が必要になるが、本校ではコミュニケーション力を「他者理解の能力」と「自己表現の能力」ととらえた。「他者理解の能力」には、他者の言葉の論理的な意味を分析する「正確な理解力」と言葉の中に込められた他者の気持ち（心情）を推し量る「深い理解力」があるとの認識を持ち、この二つの能力を高めるための授業実践を目指した。

また、一部の教科においてコミュニケーション力を一層育成していくという観点から異学年交流授業も実践してきた。

2. 今年度の研究

今年度は研究主題「共に学ぶ生徒の育成を目指して」の2年次として、これまで研究成果を生かしながら、本校校長の諸岡康哉（金沢大学教育学部教授）の指導のもとに研究を進めることとした。平成17年度の研究では「問題解決力」の育成に取り組んだ。これは社会で生きていくために大切な能力である。問題が複雑になると個人の力だけでは解決困難なこと数多くなると予想される。このような場合、複数の人間が話し合いアイデアを出し合って問題解決に当たれなければならない。普段の学校生活や授業で「共に学ぶ」経験を積むことが大切である。平成19年度でも平成18年度の研究同様に他者とかかわりながら共に問題解決にあたることを「共に学ぶ」ととらえることとした。

さらに、今年度は「共に学ぶこと」の認識論的な意義として次のようなことを考えた。

- ・生徒同士が個々人の考えや認識を話し合うことで各自の個別的認識（一面的な認識）が普遍的な認識に高まる。
- ・人間が多面的に生活すればするほど認識の範囲が広く多面的になってきたように生徒同士の横のコミュニケーションが広がるほど各生徒の認識力が深まる。

「共に学ぶ」→ 個別的認識から普遍的な認識へ 認識力の多面化・深化

「共に学ぶ」授業づくりの方向性として次のようなことを考えた。

授業を構成する場合、教師は教科内容を指導すると同時に、学習体制への指導を行っている。この意味で教師には教科的力量と共に組織的力量が求められる。「共に学ぶ」ためには教師の授業進行に生徒が一方的に従っていくのではなく自主的・積極的に参加していく生徒の学習体制を確立することが必要となる。教師が生徒に直接指導するだけでなく生徒同士による間接指導を促さなければならない。そのためには、生徒同士、生徒と教師が話し合えるような対等な人間関係を構築できるような関係づくりの指導が必要になる。つまり、「共に学ぶ」ための学習体制作りには「他者の意見を正しく理解し尊重する能力と自分の意見をわかりやすく表現する能力」が必要となる。

平成18年度の研究ではこの2つの能力を他者理解力と自己表現力としこの他者理解力と自己表現力の2つの能力を合わせてコミュニケーション力としてとらえ研究実践を深めた。学習体制の指導として、人間関係づくりのためにコミュニケーション力を育成していくことは重要である。

生徒同士の間接指導を行う場面としてグループ活動があげられる。昨年度もグループ活動を中心とした学習活動進めたが、この活動を通じて生徒間の関係を教師が観察し、生徒が関係性を学びあうことが期待できる。

コミュニケーション力＝自己表現力＋他者理解力

金沢大学教育学部の萱原教授によると、人間のコミュニケーションには知的なコミュニケーションと情緒的コミュニケーションがある。知的なコミュニケーションは、主に他者と言葉を介して論理的に理解することである。情緒的コミュニケーションは、態度や口調に表れ、その中にある他者の気持ちを受けとめ共感することである。授業では知的なコミュニケーションが中心になるが、生徒と教師だけでなく、生徒同士の情緒的コミュニケーションが関係づくりには大きく影響する。情緒的コミュニケーションを大切するためには次の点に留意する必要がある。

- ・しっかり聞くこと
- ・深く理解すること。つまり言葉だけでなく、その人の気持ちを表しているものや全体的な像を理解すること
- ・成熟した人格だけでなく未熟な人格をも受け入れること

例えば、授業中の生徒の知的な発表と思われる場合でも「すばらしいだろう」「どうだ」「これでいいの」「はずかしい」などという情緒的な面がある。それを教師や生徒たちが受け止めるということである。逆にこのような情緒的な面を受け止めないと誤解が生まれ、人間関係が構築できなくなる。教師は普段から安心して自己表現し他者を受け入れる学級の雰囲気づくりをこころがけなければならない。ただ、中学校は教科担任制なので学級担任だけではなく全ての教科担任の教師が意識して授業実践を積んでいくことが求められる。

また、知的なコミュニケーションとは昨年度の研究で取り上げた「正確な理解力」情緒的コミュニケーションは「深い理解力」に該当する。

3. 「共に学ぶ生徒」やコミュニケーション力に関する本校生徒の実態

一斉授業の中では教師の問いかけに対して、どのクラスにも積極的に発言する数名の生徒が必ずいる。特に、優れていたり価値があると思う意見については進んで発表するようである。また、学年が上がるほど意見発表する生徒は少なくなり固定化する傾向がある。その一方で、自分の意見を持ちながらも自ら積極的に発言しない生徒もいる。ただし、教師から発言を促すと、ほとんどの生徒が何らかの形で発言できる。しかし、発表の内容には個人差があり、理由や根拠まできちんと説明したり、他の人の意見に関連づけて自分の意見を発表したりする生徒から、単語だけで済ませるといった生徒まで様々である。しかし、他の生徒の意見を見下したりすることはあまりない。素晴らしい意見については感嘆の声があがる場面もある。意見交換が少ない場合でも他者の優れた意見を取り入れている学習を深めていく生徒は多い。

一般的には、グループ活動では楽しそうに活動したり、自分の意見を発表したり、他者の意見に対して疑問点などを投げかけるなど活発に交流をしていることが多い。これは少人数のため全体で発表するより緊張感や恥ずかしさが薄れ気軽に話し合えるようである。これもグループの構成によって影響される。意見発表する生徒が少なくなる理由としては「第二次性徴期による恥じらい」「学級の間人間関係」「生徒間の学力差の拡大」が考えられる。全体として授業ではまだ十分な情緒的なコミュニケーションの場になっておらず、「共に学び合う」姿勢がまだ弱いようである。

学校生活でも親しい友達同士では、会話も弾み楽しそうに交流している。そうでないと意思の疎通がうまくできなかつたり、積極的に他と関わらないことも多い。時と場に応じた言葉遣いや態度をとれない生徒もいる。全体的に相手の立場に立って、積極的にコミュニケーションする力が弱いのではないと思われる。これからも教師の働きかけで「共に学ぶ」姿勢を育てていくことが求められる。

4. 異学年交流活動や異校種間交流授業について

数々の中教審の報告では今の子供たちや家庭・地域社会について次のような指摘がなされている。

- ・我慢ができず、すぐにあきらめる傾向がある。
- ・主体性がなく受身である。
- ・学習意欲の低下や基本的な生活習慣が身に付いていない。
- ・基礎学力やコミュニケーション能力が低下している。

・家庭や地域社会が持っていた多様な人間関係の中で人間関係力を育てる機能が低下してきている。

今の日本社会は少子化が進み、兄弟・姉妹で切磋琢磨の機会が減少したり親の過保護、過干渉が起きやすくなったりする状態になった。また、日常の子供たちの生活を見ると、塾通いが増えテレビゲームやインターネット普及により年齢の違う子供同士と一緒に遊び合う機会と時間が大きく減ってきた。このことにより異年齢の子ども同士の関係が希薄になってきている。また、核家族化などにより今の子どもたちは多様な人間関係から社会性やコミュニケーション力を身につける機会が減っている。更には中教審の報告ではこれからの社会では一層、自己表現やコミュニケーション能力の重要になると述べられている。

中学校では生徒会活動や部活動で結果として異学年交流は行われている。しかし、意図的に行われているとは言えない。異学年交流活動や異校種間交流授業を取り入れることが、多様な人間関係の中からコミュニケーション力を育てる一つの場となると考える。

生徒の間でも親しい人同士ではコミュニケーションは順調に行われている。特に情緒的コミュニケーションが深いと考えられる。生徒が社会に出たときにはそのような人間関係ばかりではない。初めて会った人、知らない人、普段あまり接することがない人、人生観・価値観の違う人、あるいは文化が違う外国人とコミュニケーションを取らなければならない場合がある。親しくない人との間でコミュニケーション力が必要になる。よく知っている人や親しい人の交流だけでは十分にコミュニケーション力は育つとは言えない。違う人とのコミュニケーション、ミニ社会の体験をすることという意味でも異学年交流活動や異校種間交流授業が考えられる。

本校では昨年度から研究実践の一環としてとして一部の教科で異学年交流授業を試験的に実施した。社会科と数学科では1年生と3年生、保健体育科では1年生と2年生、英語科では3年選択と2年生、2年選択と1年生で行った。時間割上の問題もあるので特別時間割を組んだ。その中で効果があると思われる点があげられた。また、実施にあたって配慮や工夫が必要な面もあった。

①効果があると思われる点

- ・上級生に責任感や使命感が感じられた。
- ・上級生の表情に誇らしさを感じ取れた。
- ・グループ活動では最初は沈黙が続いたが、徐々に自発的な部分がでてきた。
- ・下級生の方が作品として優れていたとき、うまくまとめるだけではダメで人に見せるときの配慮が必要であると上級生の方が学んでいたようである。
- ・他の授業では活躍できない生徒がいきいきと活動できた。

②配慮や工夫が必要だと思われる点

- ・どちらの学年の生徒にもわかる共通のモデリングが必要である。
- ・初めての試みなので、教師側にも生徒側にも経験の積み重ねが必要である。
- ・どちらの学年の生徒にも分かるように観点を絞る必要がある。
- ・ポスターセッションのような形態を採用することで、双方向の質問ができるようになる。
- ・それぞれの学年の発表を単に聞き合うだけでなく、協同的に問題解決にあたらせるとよい。
- ・異学年による学力・体力の逆転現象が生じた場合の配慮が必要である。

このような今日的な生徒のおかれている状況、本校生徒の実態、昨年度の試験的な実践から今年度は異学年交流活動や異校種間交流授業に焦点を絞って研究実践を進めることとした。

5. 異学年交流活動や異校種間交流授業のよさ

異学年交流活動や異校種間交流授業の中では、よく知らず普段共に学んだり交流していない下級生に分かりやすく説明したり発表する場面がある。下級生の理解度を把握しながら分かりやすく表現し説明することが求められる。このことから他者理解力や自己表現力が育成されることが期待できる。また、各教科の学習内容を相手に分かりやすくかみ砕いて説明するには教科の学習内容の深い理解が必要になる。上級生の学力の深化が期待できる。様々な下級生と関わる体験から上級生は下級生を指導することで「役に立った」という自己有用感を持つことができる。

下級生は普段あまり交流のない上級生の意見を理解する力を身につける機会が得られる。また、上級生の進んだ表現方法や学習方法（学び方）や教科の進んだ知識を生徒の目線で学ぶことができる。

また、下級生は上級生の様子を見ることで将来の自分の進む先が見えるし、上級生は下級生を見ることでかつての自分の姿が見えることで自己理解も深まる。更に下級生と上級生との学習活動から共に学ぶことの楽しさやよさを感得できる。

更に、異学年交流活動や異校種間交流授業では一般的には、学力や人間関係の面で生徒間に大きな差がある。この差が多様な交流を生むことになる。ただ、よく生徒を観察すると同学年でも生徒間に学力や発達段階を含めていろいろな面で差がある。異学年や異校種で見つめた生徒間の差を同学年を見る際にかすことができ、同学年での通常授業においても生徒相互の学びの交流を一層活性化させることになる。

上級生→交流の楽しさ、自己理解、自己有用感、自己表現力、学習内容の深化

下級生→交流の楽しさ、将来の見通し、他者理解力、学び方の習得、教科の知識理解の進展

6. 作業仮説

これまでの異学年交流授業や異校種間交流授業についての考え方から次のような作業仮説をたてて研究実践を進めることとした。

異学年・異校種間交流授業を通して、上級生と下級生による学びの交流が行われ、学習内容の深化、学び方の習得の促進、コミュニケーション力（自己表現力と他者理解力）の育成が期待できる。

7. 異学年交流・異校種間交流授業の研究実践の展開

異学年交流・異校種間交流授業は学校の全ての教育場で、つまり必修教科、選択教科、総合的学習、特別活動、部活動などで考えられる。昨年度は時間割上の制約がある中で必修教科、選択教科で試行した。総合的学習で実施できれば効果が期待できると思われるが、本校としては、まだまだ多くの課題があり、今年度は実施しない。これは実際にコミュニケーション力の育成を考えていく上では今後の検討課題になる。また、中学校では以前から生徒会の委員会活動や部活動でも異学年交流は行われていた。本校でも例外ではない。

委員会の中で上級生の指導のもとに上級生と下級生が共に委員会の目的に応じて活動を進めてきた。部活動も異学年の集団であるが、実際の運営は教師の強い指導のもとに実施されている場合が多い。

異学年交流・異校種間交流授業を縦軸の広がりにとらえ同学年の授業は横軸の広がりにとらえ、同学年の横の広がりを基盤として異学年交流・異校種間交流授業を考える。教科の教材を軸とした教師の意図的に異学年交流・異校種間交流授業を考えていく。このような観点で、昨年度の実践をもとに必修教科や選択教科の中の学びとして実践を深め、異学年交流・異校種間交流授業の有効性や問題点、配慮すべき事項を追求していきたい。

また、異学年交流や異校種間授業が生かされる学習内容を考えていく必要がある。生徒間の学力差、経験の差があっても、多様な見方で学習効果が上がる教材を見つけたり、作っていく。学習レベルの差で学習が進まないような教材ではなく、生かされるような教材である。一つには原理的な発見をする場面がよいと考えられる。下級生の素朴な疑問を上級生が今まで解決した方法や学んだ知識を用いて分かりやすく説明するような学習活動である。その学習課題を追求する際に、上級生がミニ先生になって下級生と共に学んだり、上級生が分かりきったと思っている既習事項を再追求して深めていく学習である。例えば数学では「なぜ負の数×負の数＝正の数」「数表ある規則性を発見する場面」などがあげられる。このような活動を促すような教材や題材を開発していきたい。

このような異学年交流・異校種間交流授業の経験は、同学年での通常授業においても生徒相互の学びの交流を一層活性化させるようにしていきたい。

8. 他者理解の能力と自己表現の能力を育成するための授業づくりの方向性

異学年交流活動や異校種間交流授業ばかりでなく同学年の授業においても、平成18年度の研究実践から次のような授業づくりの方向を確認したい。

(1) 授業を知識伝達型だけでなく、学び合いの場へと転換する

知識を教えてもらい覚えることに満足するのではなく、学び合いの中で知識となる情報を発見したり出し合ったりして、さらに、それを利用できるようになることで、学びの対象をより深く理解することができるのではないかということ。

(2) 話し合い活動の積極的な導入をする

実際に言葉のキャッチボールをたくさんおこなうことで、共に分かり合うことの喜びやそこで生じる葛藤を体験することができる。特に、葛藤が生じた場合、それを乗り越えるために、自分をよりよく伝えるための努力をしたり、相手のことを深く理解しようとしたりすることの重要性を感じることができるのではないかということ。

(3) 学びへの自覚を高め、受動的から能動的な話し合いへと導く

自分の思いや願いを実現するためには、生徒は積極的に動く。自己実現を図れるような授業を仕組むことで、自発的に自己表現したり相手を理解していこうとする姿勢を生徒に育てていけるのではないかということ。

(4) 学び合いの中から知識が形成されていくような授業の流れづくりを考える

交流することで問題が解決でき、さらに新しい知識を獲得する体験をすることで、共に学ぶことの意義を知ることができるのではないかということ。

(5) 解決できない課題の中で、試行錯誤を繰り返す試練を与える授業を考える

一人では解決できない課題の中で、自分の力の限界を知り、他とのかかわりが解決への道筋になることを体感することが、深い理解力へとつながるのではないかということ。

(6) 「多数」と「少数」の相互作用による新たな価値や意味の創造を目指す授業を考える

「多数」が必ずしも正しいということではなく、「少数」と触れ合うことで別の世界を知ることができる喜びがある。そのことを通して「少数」への思いやりや理解が深まるのではないかということ。

(7) グループ学習を活用して生徒同士の学び合いを促す

グループ学習の長所として「生徒の交流が深まる。学力が高まる。社会的な能力や相手の気持ちを考える力がつく。人間関係が良好になる。」ただ昨年度の実践の中から「特定の生徒だけが意見を述

べたり学習を進める。逆に消極的に関わらない生徒が生じる。グループの編成によって学習効果に差がでる。」という面も見られた。この点に配慮しながら学習位置づけていく。

9. 今年度の研究実践（成果と課題）

4月から異学年・異校種間交流授業について各教科での授業実践、校内研究授業と校内研究会、滝充先生（国立教育政策研究所生徒指導研究センター統括研究官）による校内研修会などを行ってきた。その結果、本校での異学年・異校種間交流授業について見えてきた成果や課題について取り上げたい。

特に校内で行われた異学年交流授業では次のような学習の成果が見られた。

- ①上級生は、下級生の素朴な疑問を今まで解決した方法や学んだ知識を用いて分かりやすく説明することで、既習の学習内容の理解が深まった。
- ②上級生は、普段共に学んだり交流していない下級生の理解度を把握しながら分かりやすく表現したり説明したり発表することで、他者理解力や自己表現力を伸ばす機会ができた。
- ③下級生は、普段あまり交流のない上級生の意見を良く聞き理解しようとするところから、普段の授業以上に他者理解力を伸ばす機会が生まれた。
- ④下級生は、上級生の進んだ表現方法や学習方法や教科の進んだ知識を生徒の目線で学ぶことができた。新鮮な人間関係の中で、下級生は上級生のレポート発表をよく観察し、資料や図の活用方法や深い考察方法を学んでいた。上級生は、下級生たちの真剣さに触発され、緊張感を持って、また、自分たちの有用感を感じながら取り組んでいた。
- ⑤上級生は、下級生などの異学年の評価を受けることで、自己評価が高まった。
- ⑥中学生にとって、高校生を含めて上級生と交流授業を行うことは、近い将来の教科学習の模擬体験ができ、将来の自分の自己像を予想できる機会を持つことができた。

* 課題や留意点

主に校内での異学年交流授業について

滝充先生（国立教育政策研究所生徒指導研究センター統括研究官）によると

「異学年交流が成功するには一般的に年の差が大きいほどよい。ある活動について先行経験がありよく知っている先輩がよく知らない後輩に教えることができるからである。教える側と教えられる側の差が大きいほどよい。例えば、行事では一般的に先輩が先行経験があるので、上級生が導いたり、お手本を示したり、お世話をすることができる。このような経験は上級生に役割の自覚を促し『役に立った。大変だけど楽しい。後輩が喜んでくれた。』というような自己有用感を高めることができる。逆にスポーツや芸術など個人差が大きいものは年長者の方が優れていると限らないので上級生が自己有用感を高めることが難しい。」という。実際、本校の授業実践の場面でもこのような面があった。

- ①異年年の学習活動を設定して研究実践を行った。一般的には上級生は下級生より学力は高いはずであるが、現実には上級生の学力が高いとは限らない場合もある。このような場合、上級生としての役割を果たせない生徒もでてきた。このような場合でも知識的な学力面だけでなく、レポートの作成や発表の仕方など学習方法等の面で、上級生の経験が生かされるように配慮していく必要を感じた。
- ②校内で異学年交流授業を取り組んだ教科では1年生と2年生、2年生と3年生、1年生と3年生というように実践した。1年生と2年生の交流授業より1年生と3年生の異学年交流の方が上級生として活躍できる。

- ③委員会活動などに比べると、少ない回数の交流授業では生徒同士のコミュニケーションはなかなか上手くいかず、話し合いが進まない場合があった。普段の授業でも本校生徒のコミュニケーションの力がまだ十分に育っていると言えないので、異学年交流授業でもその面が出てしまう。これは生徒の学習に対する考え方や発達段階が影響していると思われる。
- ④異学年交流授業（異校種間交流授業）を経験させて、楽しいなど成功体験ができるように教師側の十分な授業設計が必要である。
- ⑤同じ題材で学習する場合でも上級生と下級生の学びは違う。教師は同じ学習場面でも上級生と下級生とで別の目標を設定して授業を設計する必要がある。
- ⑥必修教科では実施しやすい教科と実施が困難な教科がある。週1時間しかない教科では、十分な準備もできないし、基本的な教育課程の遂行だけで授業時間が取られて、異学年交流に取り組むゆとりがない。また、各担当教師が1名の教科では、異学年交流授業を実施する場合は80名となり、指導が困難である。

異校種間交流授業では

今年度は初めての異校種間交流授業を幼稚園、小学校、高校の協力を得て実施することができた。交流授業を実施できたこと自体大きな成果であるが、さらに交流授業を本校のねらいに近づかせるためにいくつかの課題が出てきた。

- ①校種が違くと教師間のねらい、教科内容の目的や交流授業のコミュニケーションに対する考え方の違いが明らかになってくる。幼稚園は幼稚園児の実態に基づいた活動、小学校は小学生の実態に基づいた授業、高校は高校生の実態に基づいた授業についての考えがあり、指導内容や指導過程の共通理解が十分でない。事前に交流授業に対する小学生、中学生、高校生の役割や目標についての協議を行った上での授業実践が必要であるが、その時間を十分に確保することが出来なかった。
- ②交流授業の初めには導入としてアイスブレイキングを実施している。それでも、異校種間の初対面に近い生徒同士（児童、園児）ではお互いに緊張して交流が上手くいかない場合が多かった。課題をもう少し簡単にして活動が進むようにする。特に上級生が自信をもって下級生をリードできるような課題設定がある。
- ③異校種間交流授業に取り組んだ教科では、いろいろな学習課題を設定して実践してきたが、学習課題によって生徒や児童の活動が促進されるものもある。更に、そのような学習課題の開発を進める必要がある。
- ④高校生といえども普段共に活動していない中学生とのグループ学習において、中学生をリードして学習活動を進めていくことに戸惑いがあったり、共に学習する意味を意識していない。高校生がリーダーシップを発揮して学習活動ができるように高校生への活動のねらい、活動内容、活動時にあらかじめ予想される問題点の整理などの事前指導が必要である。

異学年交流・異校種間交流授業には様々な可能性や問題点があるように思われる。今年度は一部特別時間割を作って異学年交流・異校種間交流授業を実験的に実施した。そのために多くの授業回数を確保できなかった。例えば、異学年交流・異校種間交流授業を選択教科で実施するなど異学年交流・異校種間交流授業の成果をみるには、学校の教育課程に位置づけた時間割を作成して研究実践できるような体制が必要である。

【参考文献】

- ・金沢大学教育学部附属中学校 研究紀要 第47号 (平成16年)
- ・金沢大学教育学部附属中学校 研究紀要 第48号 (平成17年)
- ・金沢大学教育学部附属中学校 研究紀要 第49号 (平成18年)
- ・中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会 審議経過報告 (平成18年)
- ・国立教育研究所生徒指導研究センターの報告書「社会性の基礎」を育む「交流活動」・「体験活動」
- ・CS研レポート「異学年交流」「地域交流」こそ育成要諦 滝充先生

研 究 同 人

校 長 諸 岡 康 哉

副 校 長 坂 口 匠

教 諭 石 田 明 美 (国 語) 教 諭 西 澤 明 (美 術)

〃 端 名 秀 雄 (国 語) 〃 表 洋 一 (保 体)

〃 清 水 絵 里 奈 (国 語) 〃 佐々木 久美子 (保 体)

〃 西 野 哲 之 (社 会) 〃 鶴 見 昭 子 (技・家)

〃 石 田 了 子 (社 会) 〃 中 村 正 寛 (技・家)

〃 小 山 均 (社 会) 〃 小 川 正 清 (英 語)

〃 浜 口 国 彦 (数 学) 〃 三 田 耕 平 (英 語)

〃 松 原 敏 治 (数 学) 〃 端 崎 圭 一 (英 語)

〃 戸 水 吉 信 (数 学) 養護教諭 沢 田 有 香

〃 室 百 世 (理 科)

〃 岩 田 哲 也 (理 科)

〃 辰 巳 豊 (理 科)

平成19年3月転出

副 校 長 平 松 仁 史

教 諭 大 山 久 祥 (理 科)